きすふれ！　３

きす☆ふれ　3

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20686340

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 本番無し, エク霊, モブ霊, ♡喘ぎ, 見せオナ, ヨシ霊, セルフ顔射

無知シチュ師匠の総受けです。攻めたちが師匠を色々そそのかします。今回は本番無し、エク霊、モブ霊、ヨシ霊、♡喘ぎ、見せオナ、セルフ顔射が有ります。
良ければお付き合いください🌸

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

- きす☆ふれ　3

きす☆ふれ　3

エクボと茂夫は難しい顔をして、落ち込んだ霊幻の両脇に腕組みをして立っている。
「……やっぱ、病院行かなきゃだめかな……」
昨日、無事射精できた喜びのまま、家でもう一回オナニーをやってみようとしたらしい霊幻。
結構いいところまではいくが、どうしてもイく事ができなくて、喜んだ分、落胆が酷かったらしい。
パニックになって夜に弟子に泣きついてしまうくらいだ。
「とりあえず、今日、授業が終わればもう一回見てあげます」
「うん……頼むわ」
「エクボ、余計な事しないでよ」
具体的には、抜け駆けなど。
エクボは肩を竦める。
「今は霊幻にイタズラしてる場合じゃねーんだから、しねーよ。安心して大学行ってこい」
『今は』という部分が気には掛かったが、茂夫はとりあえず良しとした。
「じゃあ師匠、あんまり考えすぎると余計に上手くイけなくなると思うんで、夕方までは仕事に集中して……」
コンコン、と事務所の入り口のドアがノックされた。
「よう。邪魔するぜ」
「あ、今日ヨシフ来るの忘れてた。お前らいつも通り外出ててくれ」
「へーへー」
ちら、っと強面で油断なく立つ、……モテそうな男を睥睨してエクボは、霊幻と唇を重ねる。
ヨシフの目が静かに見開かれていく。
「……すぐそこにいるから、終わったら電話しろよな」
「？ん、っ……いつもそうして……っ、ふ……」
不思議そうに、舌を絡める霊幻の瞳が瞳孔を縮ませた。

「師匠、……僕もすぐそこに居ますから」
立ち去ったエクボと入れ替わりに、茂夫が霊幻にキスする。
「どうしたんだよ、お前ら。今日は過保護だな」
くすくす笑って張った霊幻の唇を、ねっとりと茂夫は舐め上げた。
「……へえ」
感情を抑えた声で、ヨシフが茂夫の背中を見送って呟く。
「二股してんのか、先生」
「二股！？ちがっ、違う！俺とアイツらはキスフレなだけだ！」
「セフレ？……アンタはそういうの嫌悪感を抱く方だと思ってたが」

ヨシフは聞き慣れないキスフレという言葉を、思いっきりセフレと勘違いした。

「ヨシフ……？どうしたんだよ、何か怒ってる？」
手にした依頼書を握りしめて固まるヨシフを来客ソファーに座らせ、霊幻もその隣に腰掛ける。
「怒る？……そうだな、ハラワタは煮えくりかえってる。余裕かましてた自分にもな」
カタン、と依頼書を挟んだバインダーをテーブルに置いて。
「霊幻……」
ヨシフはじっと灰色の瞳できょとんとしている霊幻を見つめ、銃ダコのある指で頬を撫でた。
「ど、どうしたんだよ。あっ、もしかしてヨシフも俺のキスフレになりたいとか！？はは、まさかな……っん！？」
ぐわっと噛み付くように口付けてきたヨシフの犬歯が霊幻の唇に当たる。
「……っんあ……っ♡」
最初の強引さから打って変わって柔らかく擦り合わせてくる唇が、先端だけを固くして霊幻の上顎をむず痒く、神経を毛羽立たせるようにくすぐってくる舌が、霊幻をうっとりさせる。
「よしふっ……キス、めちゃくちゃ気持ちい……っ♡」
快楽に陥落する霊幻に──ヨシフは舌打ちした。

「いいぜ、なってやるよ……セフレに」
とさ、と霊幻はソファーに押し倒される。
ヨシフの、目が。
逆光の暗い顔の中で、敵を仕留める戦士のように冷静に、白くギラりと光っていて。
霊幻は息が詰まった。
「ヨシ……っん！」
上から降ってきた唇に声が封じられる。
ごり、と熱いものを太ももに擦り付けられて。
さーっと霊幻は血の気が引いた。
「ちょっと待て！キスまで、キスまでだろ！？」
「はぁ？何言ってやがる。何年お預けくらってたと思ってんだ……ヤらせろ」
「はあ！？！？！？！？」
霊幻の頭の中にけたたましく警報が鳴り響いていた。
「や、やだっ、やだって……！」
震える手でヨシフの厚い胸板を押し返そうとするが、呆気なく手は顔の横に固定され、暴れようとした足は絡められて抑え込まれる。
（警官の技術に勝てない──！）
ヨシフは灰皿から吸いかけの煙草を取って、煙で霊幻の両手をソファーに拘束した。
「じたばたすんなよ、やりにくいだろ。──大丈夫だ、俺以外のセフレじゃ満足できなくなるぐらい──気持ち良くしてやるよ」
「……っ」
規則的に布越しに擦り付けられる性器に、『襲われている』とはっきりと霊幻は理解する。
「ヨシフ……俺も、ヨシフに触りたい……手、外してくれよ……」
「……」
ふ、と霊幻の両手を拘束していた煙が気体に戻る。
「ん……っ♡」
柔らかくヨシフの首肩に腕を回し、霊幻は自ら口付ける。
「あ、あぁ……っ♡」
「っ、れいげん……っ！」

勢い余ってシャツのボタンを飛ばしたヨシフの手が、インナー越しに霊幻の胸をまさぐる。
「やぁ……ん……♡」
ズボン越しに擦り付けられる性器にびくりと反応して、霊幻はヨシフの背中を誘うように撫でる。

すすす、と手でまさぐって。

ヨシフのジャケットのポケットからiPhoneを取り出し、霊幻は電源ボタンを素早く５回押した。

「は！？！？」

警告音が鳴り響く。
『はい、調味警察です。事件ですか？事故ですか？』
「まっ、間違いだ！間違ってかけた！」
慌ててヨシフがスマホを霊幻からひったくる。
「たすけ……っ！もごっ！」
「お前っ！」
『……はーい、そちら向かいまーす』
ヨシフは霊幻の口を塞いだまま舌打ちする。
「おいっ、同意だったって言えよ！？」
「いや同意じゃないからな！？！？」
ヨシフはせめて霊幻のシャツのボタンを留めておこうとするが、自分が千切ったことを思い出してまた舌打ちした。
「はーい警察でーす」
丁度相談所の周りを巡回していたのか、二人組の屈強な制服警官がドカドカと入ってくる。
霊幻に馬乗りになってるヨシフをチラッと確認して、にっこり笑って両方から腕を持ち上げて引きずっていった。
「おいっ、ちょっと待て！俺は何もしてない！それに任務中で……！」
「はいはい話は署で聞きますね〜。あ、貴方は病院に行ってから被

害届出しに来てくださいね〜」
ぽかんとしながら遠ざかっていくヨシフの声を聞いていたら、エクボと茂夫が青い顔をして相談所に入ってきた。
「ど、どうした霊幻！？」
「いやー、うーん……あ、とりあえずその辺にボタン落ちてると思うから、探してもらっていい？」
霊幻はシャツを脱いで、裁縫用具を取り出してボタンを縫い付け始める。
と、固定電話が鳴った。
「霊とか相談所です」
『……霊幻所長ですね？た、大変申し訳ない……警視庁公安部、◯◯です……まさかヨシフが暴行事件を起こすとは……なんとお詫びしていいか……』
「ああ、不起訴でいいですよ」
『えっ！？いいんですか！？』
「なんか様子がおかしかったんで……本人から話を聞きたいので、取り敢えず相談所に向かわせていただければ」
『所長さんが良ければ……すみません、ヨシフ以上の適任はいないんです。できれば、このまま担当にさせていただければ……』
「安心してください、悪いようにはしませんよ」
たぶん、と霊幻は心の中だけで呟いて電話を切った。

しばらくして、ヨシフがぶすっとした顔で戻ってきた。
「なんっで通報するんだよ！！めちゃくちゃ面倒くさいことになっただろうが！！セフレなのにひどくねえか！？！？」
ん？とエクボが眉を寄せる。
「お前、キスフレとセフレを勘違いしてねえか？」
「……は？」
「霊幻と俺様たちゃあキスフレであって、セフレじゃあねーぞ。コイツは真っさらド新品の童貞処女だ」
ヨシフはiPhoneを取り出し、『きすふれ』を検索する。
やにわに青くなった。
「わ、悪い……霊幻、俺が全面的に悪かった。こ、怖かっただろ？

もう絶対しないから……」
「まあ、誤解があったんだろ？ヨシフは誰かを襲うようなヤツじゃないもんな。別にいいよ」
甘ぇな、とエクボが顔をしかめた。

「ところで、せふれって何だ？」

純粋に疑問を口にする霊幻に、ヨシフが固まる。
思わずエクボや茂夫にヨシフは視線で助けを求めるが、思いっきり目を逸らされた。

「セッ……接待フレンドのことだ」

「接待フレンド？」
「そう、性的な接待もする」
エクボが吹き出してゲラゲラ笑い出したが、ヨシフは気にせず話を続ける。続けざるを得ない。
「なんだよ、何と勘違いしてんだよ！ヨシフのエッチ！」
「……すまん」
「ったく……あ、モブ引き留めて悪かった。じゃあ、夕方、頼むな」
「はい、それじゃ、後で」
「……何だ？何かあるのか？」
ああ、と霊幻が何気なく頷く。
「上手く射精できないから、エクボとモブにオナニー見てもらってんだよ」
「ゲホゲホゲホゲホッ！！！！」
煙草を吸い込んだ瞬間に爆弾発言をされて、ヨシフは思いっきりムせた。
「なんっ……はあ！？」
「今までシモの話ができる友達がいなかったから、霊幻はキスフレの俺らに頼ってんだよ。変な癖つきそうで病院には行きたくねえんだとよ」

「……………………なるほど」
ぺたり、とヨシフは営業スマイルを顔面に貼り付けた。
「仕方ねえな、俺も見てやるよ。治療を手伝ってやる。道具持ってきてやるわ」
「いいのか！？悪いな、忙しいのに」
「気にすんな。俺たち友達だろ？」
爽やかと言ってもいい造り笑いを浮かべるヨシフを、じとりとエクボは睨んだ。

※

夕方、準備した施術室で、霊幻はまた裸になる。
エクボ、茂夫、ヨシフがパイプ椅子を広げてそれを見守る位置に座った。
「濡れにくいならローション使え」
ツバで手を濡らそうとした霊幻を見て、ヨシフはアダルトグッズ専門店の袋をゴソゴソ言わせ、中からアナル専用ローションを取り出した。
「あ、ありがと」
霊幻は両手を皿にして受け取る。
くちゅくちゅ、くちくちと霊幻が手淫する音が施術室に響きはじめた。
「あれ……勃たない……」
ふにゃふにゃのままの性器に焦って、霊幻は荒っぽくシゴき始めた。
「おいおい、痛くなんぞ……勃たせなきゃ、イかなきゃって緊張してたらそりゃあ萎えもするだろ。……うーん、こりゃあいよいよ病院かな」
大袈裟に悩んでみせるヨシフに霊幻はショックを受ける。
「そ、そんな、昨日はイけたのに……！」
「うーん……前立腺マッサージしてみるか？」
「ぜんり……？」
霊幻の目がすがるようにヨシフを見る。

「医療行為だから、本来はおススメしないんだが……まあ、自分で自分にやる分には、自己責任だ」
「……やってみたい」
ニタリ、と。
ほんの一瞬だけ、ヨシフが悪い笑みを浮かべた。
が、すぐに真面目な顔に戻って小さなチューブをポケットから取り出す。
「これは麻酔クリームだ。筋弛緩剤も少しだけ混ざってる。先ずはこれを肛門に塗り込め」
「こ、こうもん！？」
「前立腺マッサージはケツに指を突っ込んでやるんだよ。……やめとくか？」
「……いや、やる」
霊幻は藁にも縋りたい気分なのだろう。ヨシフが押し出したクリームを素直に、がばりと足をＭ字に広げてすぼまりに塗り込み始めた。
「なんかちょっと……変な感じがする」
「薬が効いてきたんだろ。ローションつけて、指先だけ挿れてみろ」
霊幻は頷いて、陰茎からローションを拭って肛門に塗り付ける。
充血した赤い肉をちらちらめくり見せながら、くぷ♡くぷ♡と霊幻はアナルに中指の先端を出し入れし始めた。
「……っ、」
無防備に肌を、性器を晒す霊幻に茂夫が喉を鳴らす。そそのかして自分から体内に指を挿れさせていることにも、罪悪感と興奮が襲ってきていた。
「痛くねえか？」
「ああ」
「じゃあ、思い切って第二関節くらいまで挿れてみろ。ローション足してからな」
こく、と霊幻は頷いて、深呼吸する。
「ん、ッ……！」
ずぷぷぷ、と指が埋まっていくのを、思わずギャラリーは身を乗り

出して凝視した。
「入っ、た……」
「よおし、良くやった！えらいぞ、霊幻」
異物感に呼吸を荒くする霊幻が、ヨシフの褒め言葉にへらりと嬉しそうに笑う。
「そのまま、腹側をぐっぐって押してみろ」
「こ、う？」
「ほら、勃ってきただろ」
徐々に充血してくる陰茎に霊幻は目を輝かせる。
「本当だ……！」
「後はイくだけだ。前立腺を押しながら、ちんこを扱いたり捏ねたりしてみろ」
「わかっ、たぁっ♡」
ぁ、ぁ、とちゅこちゅこと性器を扱く音に、甘い掠れ声が混ざる。
（アナニーしてる師匠……エロい……）
茂夫はぐちぐちと内部を弄る霊幻のスラリとした指の動きを、その度に蠢く肉輪を見つめてしまう。
（あそこに挿れたら……絶対気持ちいい……）
ごく、と唾を飲んで。
「師匠、片手でやるんなら、親指で先端をいじりながら、裏筋を擦るようにするといいですよ」
「こう、かっ？♡っうン♡あ、これ、きもちい……♡」
快楽を追う霊幻は、自分が危険な男達にどんな痴態を晒しているのか、理解していない。
「霊幻、上手だ。お前は本当に飲み込みがいいなあ？」
優しげなエクボの声が掛けられて、霊幻はふにゃりと蕩けた笑顔を浮かべる。
「まあ、な……♡あっ♡あっ♡イきそ……っ♡」
「そのまま、きもちーのがまんできるか？」
「でっ♡できるっ♡……ァっ……♡♡♡♡」
ビクビクビク、と丸まった背中が震える。
前立腺や精管を内部から押されてびゅっ♡と出た精液が、霊幻の顔にぱたたっとかかった。

（（（セルフ顔射……！）））
興奮を隠して、男たちは真面目な顔を浮かべる。
「やるじゃねえか、先生」
「やったな、射精できたな？」
「師匠、すごいです」
ティッシュで顔を拭いてやりながら３人は口々に褒めて頭を撫でてやる。
指を抜いたアナルが絶頂の余韻でくぱ♡くぱ♡してるのを、気にしないふりをしながら。
「これで、病院行かなくていいよな……？」
ほっとする霊幻に、それはどうだろう、と思いつつも。

※

真っ暗にしたセーフハウスで、ヨシフは音量を絞った米軍極東ラジオを流して、ウイスキーを傾けていた。
スマホが鳴る。
「……ヨシフだ」
かけてきた相手を確認して、後ろめたさにヨシフは出る。いつもならこの時間なら無視していたが、今日は話したい気分だった。
『ヨシフ、今いいか？』
「ああ。どうした？罵りでもしたくなったか？」
『何の話だ？……あのさ……』
ヨシフはスマホを握り直す。

『イっても精液が出ないんだけど……どうしたらいい？』

「は？」

ヨシフは思わず素になった。

続